



大野伴睦氏（大野泰正事務所提供）



特別  
寄稿

# 義理と人情と やせがまん

—大野伴睦よ、再び—



文／丹羽文生  
(にわ・ふみお)

拓殖大学海外事情研究所教授

1979年石川県生まれ。博士（安全保障）。東海大学大学院政治学研究所博士課程後期単位取得満期退学後、作新学院大学総合政策研究所研究員。拓殖大学海外事情研究所助教、准教授を経て2020年から現職。この間、東北福祉大学、青山学院大学、高崎経済大学等の非常勤講師。岐阜女子大学特別客員教授、拓殖大学海外事情研究所附属台湾研究センター長も務める。専門分野は政治学、政治過程論、日本外交史。著書に「日中問題」という「国内問題」：戦後日本外交と中国・台湾」（一藝社、日本臨床政治学会出版賞）、「日中国交正常化と台湾：焦燥と苦悶の政治決断」（北樹出版）、「民主党政権論」（共著、学文社）等多数。

国会議員のサラリーマン化が進行している。決まった金額の月給（歳費）を受け取り、党務も政務も選挙区のメンテナンスも無難にこなし、失言と捉えられることを恐れて冗談やユーモアさえも口にせず、「長い物には巻かれろ」で上の人間には逆らわない。何ともむなしの限りである。かつては、強烈なキャラクターを持つ政治家が何人もいた。本稿で取り上げる元自民党副

総裁の大野伴睦も、その一人である。

典型的な叩き上げ

大野は典型的な叩き上げである。明治半ばに岐阜県山間部で生を受け、徒手空拳で上京し、大正政変の民衆暴動に参加して投獄され、その後、「平民宰相」こと原敬の知遇を得て立憲政友会の院外団員となる。やがて、日本にお

うもあ賞」を受けた。「強盗に『追い銭』を渡して更生するように論じた」というのが受賞の理由だった。ユーモアと言え、こんなこともあった。57年8月、後にマレーシアとなるマラヤ連邦のイギリスからの独

立を記念する行事が開かれた。大野は岸信介からの命を受け、首相特使として式典に参列した。その帰り、大野は中華民国總統の蔣介石に面会すべく台湾に飛んだ。大野は蔣介石に会うなり「10年に及ぶ戦い

ける「細菌学の父」と称される北里柴三郎のバックアップで東京市会議員に当選し、間もなく国政デビューを果たした。

戦時中の翼賛選挙での落選を除き、衆議院議員当選13回を数えた。この間、衆議院議長や北海道開発庁長官といった数々の要職を歴任し、1955年11月の保守合同に際しては、自由党総務会長として、「大猿の仲」だった日本民主党総務会長の三木武吉と手を握り、保守勢力の大同団結に奔走し、総裁代行委員、副総裁として初期自民党を育て上げた。

国会議事堂の裏手にある道路を挟んだ向かい側に衆議院第一議員会館、第二議員会館と並んで参議院議員会館が立っている。その503号室の中に入ると議員執務室の壁に「義理と人情とやせがまん」と書かれたタペストリーが掲げられている。ここは、大野の孫に当たる自民党副幹事長の泰正議員の事務室である。

このタペストリーの文字は、大野の揮毫をプリントしたものだ、その豪快な筆致に圧倒される。「義理と人情とやせがまん」は大野のモットーだった。それを体現するかのよう、大野には浪花節の如き人間味あふれるエピソードが数多く残されている。本人の著書『大野伴睦回想録』（弘文堂、

強盗の優しさに心打たれ

「強盗のおじぎして去る夜半の春」という大野自作の俳句がある。これは61年3月18日に実際に起こった事件を詠ったものである。その日の未明、大野の自宅に強盗が入った。強盗は「恩人を救うためにやむにやまれず初めてこんなことをするが、金がほしい」と言いながら、大野の首元に刃物を当ててきた。

哀れに思った大野は、何と外遊用に用意しておいた札束を強盗に手渡したのである。すると強盗は「10万円でもいい」という。「まあ持つていけ」と、さらに追加すると、強盗は「それは要りません」と、すっかり弱気になり、「働いて必ず返します」と言いつて逃げ去っていった。大野は命惜しきで札束を差し出したわけではなく、「恩人を救うため」という強盗の優しさに純粋に心打たれたのである。

翌年3月、大野は「ゆうもあくらぶ」から、世の中を明るくするユーモアのある話題を提供した人に贈られる「ゆ



左から岸信介、大野伴睦、三木武吉の各氏 写真／毎日新聞社



岐阜羽島駅前に建つ大野伴睦夫妻の銅像(大野泰正事務所提供)

で中国には膨大な損害をかけたのに、あなたは少しも報復措置をとらず、むしろ進んで日本人の帰国の便をはかられた。日本人として深く感謝の気持ちを表したい」と述べた。いわゆる「以德報怨」である。蒋介石は「そのように丁重な謝辞を述べられては、かえって恐縮です」と応じた。

形式ばった会談が終って宴会へ。アルコールの勢いで気が緩んだ大野は、蒋介石に向かって「蒋介石さん、実は今だから言えるのですが、戦争中はずいぶんとあなたの悪口を言って歩いたものですよ」と切り出した。興味深そうな表情を浮かべる蒋介石が「そうですね、どんな悪口か教えてください」と言うと、大野は「では、お教え

しましょう。『蒋介石殺すにや刃物はいらぬ。玄能一丁あればよい』とね」と答えた。

「玄能」とは金づちのことである。蒋介石「石」という石は金づちで叩けば潰せるという意味である。大野の随員たちの額から汗が流れる。ところが大野のジョークに当の蒋介石は大笑い。片言隻語の中にも深い知性とセンスがこもっていた。

### これ以上アカにはならない

大野が国民代表として強いこだわりを持っていたのが陳情だった。大野は「党派にこだわらず、相手を選ばないで、一応はその事柄が大局からみて国に迷惑をかけないのなら、私はなんでも尽力する」と語っている。

56年9月に開催される中国共産党の第8回全国人民代表大会に出席するため、日本共産党第一書記の野坂参三が、当時、日本と外交関係のなかった中国を訪問しようとした。ところが外務省が一向に渡航許可を出さない。困り果てた野坂は、大野に口添えを依頼することにした。

大野は、これを引き受け、外務省に「思想的にアカでない人間を中共にやるのは心配だが、アカの野坂君をアカの国に旅行させても、これ以上アカに

はならない。格別、中共行きを騒ぐ必要はないよ」と言って、いとも簡単に処理してしまった。「アカ」とはコミュニストを指す際の隠語である。確かに理にかなった説明ではある。大野の面目躍如と言えよう。

ある日、大野の選挙区である岐阜1区の域内に入る揖斐郡久瀬村から村長の高橋定がやって来た。ダム建設の協力を仰ぐためである。しかし、高橋は同じ岐阜1区で大野と対立する自民党の木村公平陣営に与<sup>よ</sup>っていたため、大野邸に到着するも、敷居が高く、なかなか中に入れない。

だが、今さら帰るわけにもいかず、勇を鼓して大野邸の門をくぐった。高橋は大野に「今日まで先生に1票も、わが村から差し上げていないのに、ずうずうしくお願いにあがって申し訳ありません」と言いながら、ダム建設の協力を要請した。

大野は虚心坦懐<sup>たんかい</sup>に高橋の訴えに耳を傾け、「それは簡単にはゆかぬ問題のようだができるだけ努力しましょう」と述べ、これを快諾した。久瀬ダムの竣工は当初、10年先と言われていた。ところが、大野の後押しにより3年を待たずして完成する。

それだけではない。鉄筋コンクリート造の村役場に小学校、さらに道路、上下水道と、周辺地域のインフラも大

野の尽力によって整えられた。高橋は、すっかり大野に魅了され、以来、久瀬村における大野の支持が広がっていったという。

中には、いささか型破りな陳情もあった。「湯島の白梅」や「長崎のザボン売り」をはじめ数々のヒット曲を生み出した流行歌手の小畑実からの依頼である。結婚に反対するフィアンセの両親を説得してほしいというもなかった。大野は笑顔で快諾し、相手の両親に会って「わたしの息子の嫁にするのだから、理由はいろいろとあろうがぜひ頼む」と頭を下げた。飛ぶ鳥を落とす勢いの大物に、ここまでされたら拒絶するわけにはいかない。小畑は感激のあまり言葉を失った。

小畑は幼い頃に両親を失っていたため、挙式には大野夫妻が親代わりとして出席した。新婦の両親は若い2人に「大野先生のご恩は2人とも終生忘れてはいけない。わたしたち同様の両親と思って、尊敬と孝養を尽くさない」と述べたという。

それにしても、ここまで味のある政治家は後にも先にも大野だけだろう。近頃の永田町は渴き切っている。血と汗と涙がなく湿り気が感じられない。何もかもが機械的で面白みに欠ける。大野伴睦よ、再び……。そんな思いである。